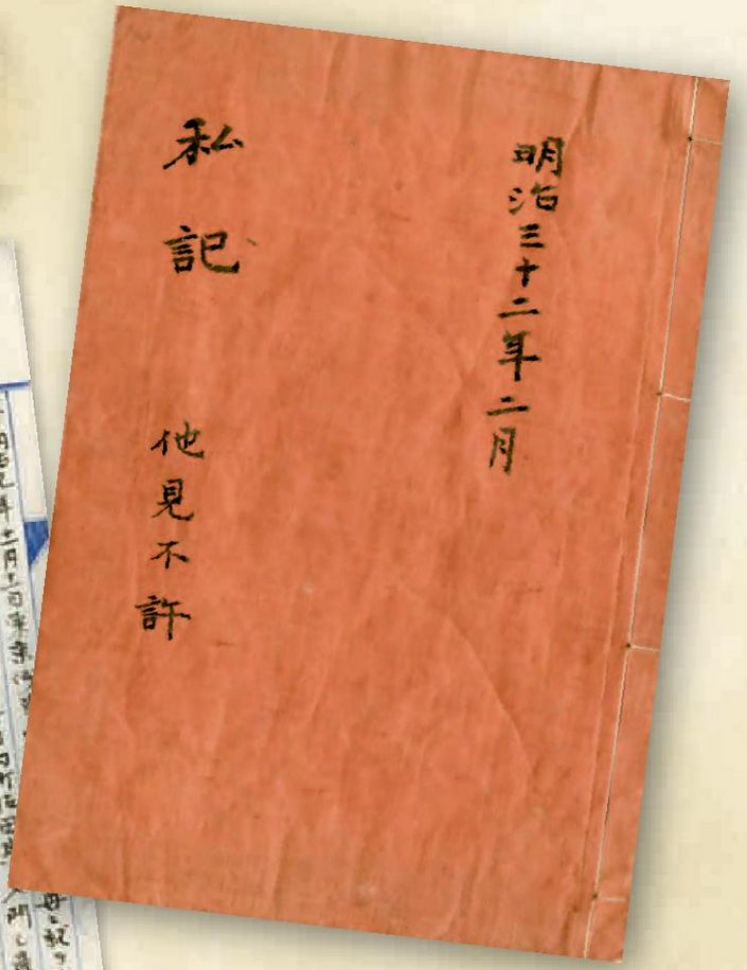
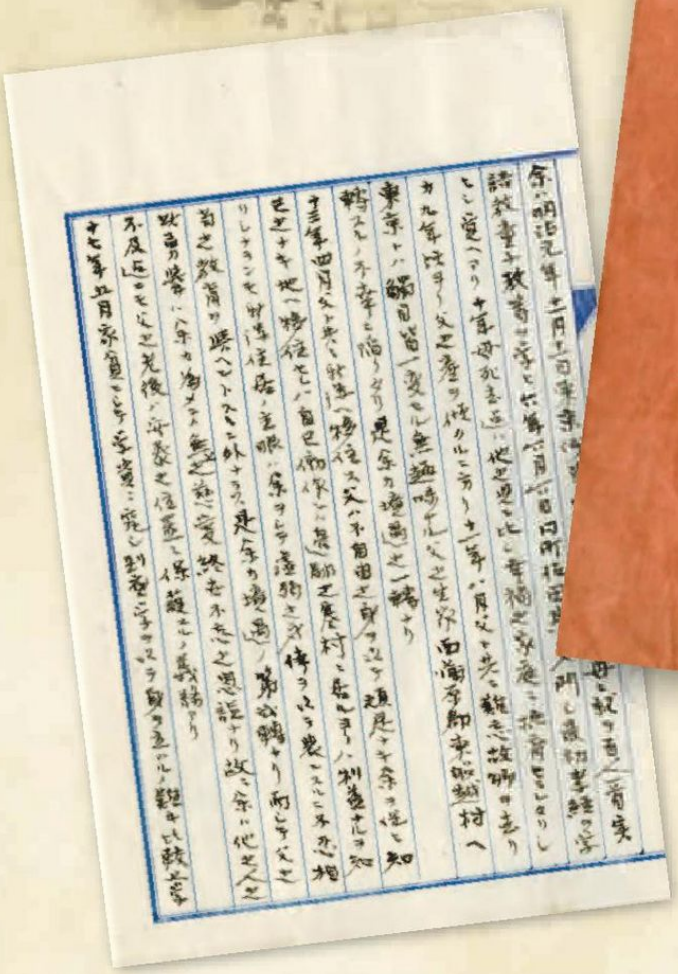
小林力三商店

株式会社コバリキ

100周年記念「小林力三物語」





◀▲ 初代 小林力三 31歳の時に記した回想録

100TH ANNIVERSARY

小林力三物語

KOBAYASHI RIKIZOU

激動の明治・大正・昭和史を新潟港に生きた小林力三物語

◀ 初代の小林力三、最晩年の写真

▲ 大連汽船の河北丸、4,900トン、大連―新潟に就航

［創業前史］北前船の終えんと近代海運の幕開け

明治維新は自由と競争経済の幕開けになった。新政府が特権的な豪商による株仲間制度を禁じたことで、新潟港の海運業界には海産物商や米穀商、材木商などの新顔が次々と参入した。幕藩体制下の北前船交易で繁栄してきた津軽屋、当銀屋など老舗の廻船問屋の多くが衰退し、代わって荒川太二、斎藤喜十郎、鍵富三作、藤田文二、田代三吉らの新興勢力が台頭したのだ。

さらに明治10年代、西南戦争を機に岩崎弥太郎の三菱商会が国内航路の覇権を握ったことに反発して、益田孝の三井物産と第一国立銀行の渋沢栄一が日本海を舞台に海運戦争を仕掛けた。これに酒田や伏木の海運業者が巻き込まれた。なかでも大阪・堂島への米積み出し量が多い新潟港は激しい主戦場になった。三菱派の旗頭は藤田文二、三井派の頭目は鍵富三作。互いに譲らぬ経済戦争が1885（明治18）年まで延々と続いたのである。

小林音蔵（後の初代力三）が海運業に身を投じた1884（明治17）年は、その戦いがピークにあったころだ。大小の廻船問屋が軒を並べる信濃川西側の新潟町芳町（よしちょう）に廻船問屋「綱伝」があった。ここに16歳になったばかりの音蔵が見習い奉公にはいった。綱伝は和船を所有して直江津、柏崎、佐渡夷の近郊地を、ときには函館や江差などの港々まで手広く取引した。

主人の綱谷伝五郎から廻船業のイロハを叩き込まれた音蔵だが、5年間の奉公は給金も安く極貧の暮らしだったと回想する。それでも商売のコツを覚えてからは、主人の特別な許しで梨など果物類を北海道に移送する手間賃稼ぎで生活費の足しにする才覚をみせたりした。

三井・三菱戦争で活躍した藤田文二は幕末からの新進の米穀商だ。苦労の末に米取引で財を築き、傾いた老舗当銀屋の再建に手を貸し廻船業にも進出した。近代簿記で帳簿付けした新潟商人の第一号という。最初は帆船だけだったが、回漕部門を強化しようと1891（明治24）年春、鳥羽鉄工所（三重県）に汽船建造を依頼した。だがその運航を差配できる人材が藤田商店にいなかった。そこで藤田回漕店の番頭が音蔵に白羽の矢を立てた。鳥羽港で新鋭船を受領し、新潟港まで無事に回航させるのが音蔵の初仕事になった。藤田文二は音蔵に汽船事務長の肩書を与えた。初めは乗船指揮で函館、江差と新潟を往復したが、過労で体を壊して後は陸上勤務での取引差配に専念した。ほどなく回漕店を統括する支配人格にのし上がっていった。

転機は、文二の跡取り息子簡吉が慶応義塾を卒業し取締役となって入社したころにやってきた。簡吉とは一歳違い。音蔵には勉学の志を断って綱伝に奉公した16歳の時の無念が心の底にずっとあった。自身も愛読した「学問のすすめ」の著者福沢諭吉から直に薫陶を受けて新潟に戻ったという若主人簡吉の晴れ姿がまぶしくて仕方がなかったのだろう。音蔵はこのとき力三に改名した。そして簡吉の度重なる懇請を振り切って辞職願をだした。1897（明治30）年11月のこと。その後、簡吉は大正期には新潟米穀取引所理事長や新潟商議所副会頭の重職を務め、新潟財界の重鎮になった人物である。

頼みは己の才覚ひとつ、海運業の荒波にこぎ出す

音蔵改め小林力三は、このとき独立開業の道を模索し

▲ 満鉄幹部との商談で中国に渡った二代目小林力三

▲ 竜が島の出張事務所に立つ力三社長（パナマ帽の男）

たが、世間の風は厳しく予期した資本も集まらなかった。そんなとき1898（明治31）年12月、海運界の長老荒川太二の養子荒川才二から声が掛かり、小沢七太郎（後に二代目七三郎を襲名）が社長を務める新潟運送株式会社の支配人に迎えられた。新潟運送㈱は1893（明治26）年、斎藤庫造（後の喜十郎）、荒川才二や小沢七三郎、高橋助七、石山治四郎らが共同出資で設立した。408トンの汽船太平丸で小樽―新潟―大阪航路に乗り出し、米、清酒、海産物を運んだほか旅客も乗せて繁盛したのである。

沼垂の醸造家（後の今代司酒造）山本隆太郎が専務を務めていたが、海運実務に精通した小林力三が入社してほどなく専務交代となった。社長の二代目小沢七三郎は斎藤喜十郎の女婿で、力三より6歳若いが、初代が始めた米穀商から廻船業への多角化路線をさらに広げて、1910（明治43）年には米国スタンダード石油（現・エクソン・モービル）の県下総代理店となっている。海運・倉庫や艀業に三菱鉱山の石炭販売もやり、この石油販売で充実の布陣を整えたのである。

力三がいよいよ創業する腹を固めたのは大正初めころである。力三の海運界での評判を聞いて面会にきた新潟商業卒の高橋由松（後の小林力三商店専務）は、そのとき力三から独立をめざした覚悟を感じたと記している。

新潟港の主力貨物が米穀や海産物から石炭、石油や鉄鋼材、石灰鉱石など工業品に変化しつつあった。新潟鉄工の造船工場が進出し、新潟硫酸会社のほか宝田石油の大製油工場（後の日本石油新潟製油所）が操業するなど、工業化の波が港湾域で広がっていた。

さらに日露戦争後に誕生した国策会社の南満州鉄道会社（通称・満鉄）が経済活動を拡大させ、それが対岸の新潟や日本海各港の荷動きに好影響をおよぼしてきた。満鉄は初代総裁の後藤新平の手で、鉄道事業を基軸に撫順鉱山や鞍山製鉄所を再生させ、大連汽船を傘下に収めるなど壮大な事業展開に動いていた。力三は満鉄10代目総裁山本条太郎の秘書の知遇を得てのち、満鉄の政策に関心を持ち勉強もした。秘書が鉄道部長に出世したころからは一層熱心に、満鉄の事業活動を新潟港に引き寄せる算段を考え続けたのであった。

あるとき満鉄のその幹部から「お前の手で撫順炭を扱ってみないか。新潟でどのくらい販売できるだろうか」と打診されたのだ。新潟運送㈱では三菱鉱山の石炭を商っており、商売がバッティングしてしまう。力三はこれまで七三郎社長の手腕を認め、仕事の話は隠さず打ち明けていた。東京や大阪、あるいは羅津や大連など出張した先々から、耳にした情報や商談概要、新聞記事をこまめにはがきや封書で送ってきた。そうした新聞やはがき類が小沢家文書に多数残されているのだ。

だから満鉄からの話を自分の腹だけに収めず、主人にも明かしたであろう。ただ新潟運送㈱石炭部は苅部長蔵主任の手で順調に営業を伸ばしてきた。七三郎も競合を懸念しただろう。何度か談合を重ねるうちに予期せぬ主人の胸の内を知る羽目になった。そのとき七三郎社長は税関支署長だった某氏を小会社の艀曳船会社に天下りさせていたが、ゆくゆくはその某氏を力三に代えて専務ポストに就けたい腹だったのだ。

初代力三、満鉄の石炭輸入で商機をつかむ

「ここが潮時かな」と思い定めた力三は1922（大正11）年暮れ、七三郎に辞表を出した。力三の退任を待って新潟運送㈱は翌23年12月、艀曳船会社を併合して

小林力三物語

▲ タグボート大連丸の進水式。
左から6人目が小林力三社長、その左が高橋由松専務

▲ 見送りの人々でにぎわった新潟港の日満航路。撮影は1940年ごろ

新・新潟運送艀㈱を誕生させた。専務には元税関支署長が就任した。余談だが同社は1942(昭和17)年、政府の戦時統制策により運輸部門だけが日本通運会社に併合され、日本通運新潟支店となり、今日に至る。

新潟運送㈱を退社したころから、力三を身内の不幸が次々と襲った。東京高商(現・一橋大)から三菱商事に入り大きな期待をかけていた長男享作(こうさく)が虫垂炎をこじらせて急逝。次いで東京帝大生の次男利策も結核で死亡。その一カ月後には父織邊(おりべ)も跡を追うように亡くなった。

小林織邊は西蒲原小吉村(旧中之口村)の農家の三男。病で幼時に失明したが、懸命に鍼灸医の技術を磨き、安政のころ江戸に出て浅草界隈でも名の知れた名医となって幕府御家人の娘菊と夫婦になった。二人の間の息子音蔵は浅草山谷町に生まれた、ちゃきちゃきの江戸っ子だ。菊の実兄荻原半之丞は新潟奉行所で広間役だったが、新潟在勤中に病で没している。

戊辰・明治維新の混乱で織邊の家産が傾き、女房の菊も病で亡くした。その翌年1878(明治11)年夏、織邊は10歳の音蔵に手を引かれて三国峠の難所を越えた。めざした先は実家の西蒲原ではなく、亡妻の実兄が眠る浅からぬ縁の新潟町だった。古町13番町に居を定め、織邊は音蔵に勉学をと必死に働いたがかなわなかった。そんな父の姿を見て育った音蔵は終生の孝行を尽くした。

傷心の力三が再起を賭けて活動を始めたころ、新潟港にも大きな変化があった。念願だった港湾整備が信濃川大河津分水の完成で本格化し、1925(大正14)年から26年にかけ臨港埠頭、県営第一埠頭が相次いで完成した。それまでは東西に150㍍ほどの突堤が二本突き出し、高さ13㍍の灯台が1基あるだけの港とは名ばかりの哀しさだった。敦賀港が政府指定の一級港湾に選定されるのを横目に悔し涙を流すしかなかった。それがようやく3千ー5千トンの大型船が接岸可能になった。力三は撫順炭の輸入商として新島町通り3之町に住居兼用の店を構えたのである。さらには小沢七三郎の計らいで大連汽船の船舶代理店も新潟運送艀㈱から移管された。高橋由松専務は力三の右腕となって社業を支えた。石炭販売も順調に伸び、新潟石炭商組合を結成し、力三が初代組合長に推された。

新潟港を日満航路の拠点へ押し上げた二代目

旧制新潟中学に進んだ力三の三男良介は、同級の坂口炳五(後の作家・坂口安吾)ら悪友の感化で、軟派な学生生活を謳歌した。ところが突然に兄二人が他界し、自身も結核のため旧制新潟高校を中退し療養生活に。家業のことなど念頭になかった日々が、1930(昭和5)年4月3日、父の急逝で一変してしまった。葬儀を終え取引先巡りをする中で、23歳の良介は二代目力三に改名する。初代力三が業界に培った信用力の重さを知り、その遺産をちゃんと背負って生きぬく覚悟を、力三襲名の形で示そうとした。

昭和の金融恐慌を経て、坂道を転がるように時代が急変しはじめた。発足当初は管轄機関の満州都督府の支配権からも自由だった満鉄経営であったが、関東軍が力を増すのに伴い植民地化政策の要として使われだした。1931(昭和6)年9月に柳条湖で満鉄線路を爆破し、それを合図に関東軍は満州全域を制圧、満州事変である。翌32年3月、国際連盟の警告を無視して、満州国の建国宣言を発した。

新潟港の周辺でも大きな動きがあった。1929(昭和4)年暮れ、ようやく清水トンネルが貫通して、東京への直通鉄道に道が開けた。2年後の31年9月に上野ー新潟間が

▲ 戦後の小林力三商店の正面。眼鏡の人は、後に三代目社長となる早大学生当時の小林亨

▲ 會津八一が主宰した「史談会」。八一の右が小柳胖（元新潟日報社長）。前列左端が小林力三。北方文化博物館分館で1947年撮影

全通となり7時間10分で結ばれた。それまでは直江津、軽井沢経由で16時間弱もかかっていたのだ。満鉄も日本への時間距離を縮めようと朝鮮の図門や羅津に向けた鉄道敷設を加速させた。海では鍵三合資会社の船舶部が元山、清津と新潟間に不定期航路に乗り出し、これに触発されて嶋谷汽船（岩国）が清津―新潟間に北鮮航路を開設して、笠戸丸（1,400トン）を配船した。日本海を挟んで満州圏経済と日本経済が交錯したのだった。

二代目力三に目が回るほどの日々が始まった。満鉄からの輸入品は撫順炭やコークスのほか、鞍山製鉄所からの銑鉄、鋼材、肥料用の大豆粕や袋入りの大豆など多彩になった。輸出品では満州で需要が急増したセメント生産のための石灰石も加わった。小林力三商店の業態も輸入商から、船舶代理店、港埠頭での荷役業務、大連汽船の貨物船の入港が増えるにつれ艀曳船業務までも必要になった。

そして1938（昭和13）年春には満鉄は新潟港に日満倉庫を開設し力三を営業所長に。しかも利益は折半という破格な条件で。さらには満鉄東京支社鉄道課兼新潟鮮満案内所長の肩書も付与した。まさに満鉄新潟所長であった。

そんなとき満州国の首都新京（現・長春）と東京を最短の36時間で結ぶという夢の超特急構想が浮上した。日本海航路では羅津と新潟を20時間で結ぶため、速力20ノットの7千トン級快速船を計画。鉄路には亜細亜号に匹敵する超特急を走らせるが、問題は海路だとみなされ、新潟港の港湾状況が焦点になった。夢構想の推進役は満鉄で裏には関東軍もいたのだろう。逓信省や大阪商船（三井財閥）は「国内航路を荒らす暴挙だ」と猛反対した。日本郵船（三菱財閥）、大阪商船と肩を並べる会社に成長したい大連汽船。新潟港を足掛りに日本本土への有望な定期航路開設を目指していた。それが三井や三菱には脅威だった。論戦は国会に持ち込まれ、政治戦の様相を呈していった。

二代目力三は満鉄本社と連絡を取りながら、力の限り奔走した。1935（昭和10）年夏、元海軍少将の高橋寿太郎衆院議員の元に新潟港資料を携えて上京。反対派は「新潟港は劣悪で、3千トン級船舶の入港もままならない。7千トン船舶など論外だ」と主張していた。力三は1万トン級のタンカーが接岸した実績をもとに反論資料を用意した。「河口港ではあるが、それも浚渫体制を完備すれば、何の問題もない」と力説した。新潟県議会も田下政治議長が先頭になって力三の背中を押した。

決着は1940（昭和15）年1月、大阪商船系の北日本汽船と大連汽船、朝鮮郵船の3社が共同出資で国策会社の日本海汽船会社を設立し、同社が羅津―新潟間に運航することになった。力三の夢実現にはほど遠い決着ではあったが、社業はさらに忙しさを増した。朝鮮郵船の代理店も引き受け、大連汽船の新潟―大連航路をさらに台湾まで延伸させて貨物手配する仕事も加わった。戦雲が濃くなるとともに、新潟港には満州国に向かう軍人や軍属のほか、各地からの開拓団員や満蒙開拓青少年義勇兵の数が増えていた。そんな旅客の中に元憲兵大尉の甘粕正彦もいた。力三は甘粕と酒宴で酌み交わしたが、「妖気ただよう人だった」と語った。石油開拓に奔走していた出光佐三とも面識をもった。日中戦争から太平洋戦争の時代、歴史の歯車が音をたてて急回転し、新潟港は重要な舞台になっていた。力三も羅津、新京、大連、台北そして新潟、東京…駒の一つとなって、それらの舞台をひたすら駆けずり回った。

戦後の新潟復興で、二代目は八面六臂の活躍

1945（昭和20）年8月15日正午、敗戦の詔勅。小林力

小林力三物語

▲新潟まつりで繰り出す新潟商談所の和田閑吉会頭（行列の先頭左）と小林力三副会頭（右）

▲二代目力三、40代中頃。連合青年団団長や会議所副会頭で多忙だった

三商店は前日までの嵐のような繁忙がまるで嘘のように、静寂につつまれた。たとえば満鉄からの撫順炭。月間で1万トンを超え、新潟鉄工など港内工場だけでなく、酒蔵元にも販売網を広げた。三池炭を扱い県内トップの敦井栄吉商店に迫るほどの勢いだった。それらが幻と消えたのである。かろうじて1937（昭和12）年1月から手掛けた練炭の製造販売だけが残った。

ところが力三の日々は戦前と変わらない。相変わらず多忙で、各地を飛びまわる。1947（昭和22）年6月、戦後復興を担うべく新潟県連合青年団が長岡市で結成され、初代委員長に力三が推挙された。翌48年10月、初の公選制で新潟県教育委員選挙が行われ当選した力三が互選で教育委員長になった。二つの肩書を駆使して今度は、国立大学誘致の県民運動の先頭に立ち、ついには49年7月新潟大学の開学を実現させたのである。

新潟大学（運動では北日本総合大学と称した）の誘致運動では、県連合青年団が提唱して「青年教養講座」のテキスト作りを実践した。形だけの掛け声でなく、テキスト作成には會津八一や相馬御風の門を叩いて執筆を頼み込み、画期的な講座テキスト集を発刊したのであった。

二代目の持ち味は右も左も、硬派も軟派もで、人脈が広く多彩なことにあった。人に接するとき予断を排して素直に相手の懐に入りこむ。なにより酒が好きで陽気な酒宴は延々。関東軍の将校とも盃を交わす一方、特高警察に狙われ発表の機会を奪われたプロレタリア美術作家らと親しく交わり彼らの作品を購入して、生活を援助した。村上出身の矢部友衛ら、戦前に買い集めたプロレタリア美術家同盟の前衛画家達の絵画約250点を1980年代、新潟市美術館に寄贈しているのだった。

経済評論家の三鬼陽之助が幹事役をした明治40年生まれの会が、東京柳橋の料亭「をぎの」を会場に毎年開かれた。今里広記、森暁、小林宏治、守屋学治ら大物財界人に、愛知揆一、三木武夫の政治家や稲葉秀三も顔をだしたが、力三もこの会の常連だったのだ。また會津八一が新潟市南浜通りの北方博物館に住んだころ、気のおけぬ有志を集めて東洋美術の勉強会を「史談会」と名付けて開いたが、力三はそこにも常連で八一の炯眼（けいがん）に接したのだ。

1949（昭和24）年、和田閑吉が新潟商工会議所の会頭になったとき、力三は苅部長蔵とともに副会頭に就任。当時、新潟県と福島県が東京電力、東北電力を巻き込み只見川の電源開発問題で大ゲンカしていた。和田閑吉は東北電力会長の白州次郎を向こうに回して、ケンカ仲裁に動いたが、このとき和田会頭は小林力三に東京電力とのパイプ役を依頼した。それが契機になって力三は後々の原子力発電に縁を持ち、柏崎・刈羽への原子力発電所誘致運動につながる。誘致推進で連携した柏崎市助役今井哲夫（後に市長）は県連合青年団でのごく親しい仲間であった。

朝鮮郵船の船舶代理店だった関係で1959（昭和34）年には当時の北村一男知事に頼まれ、北朝鮮帰還事業を進める帰国協力会副会長・会長を務めた。帰国事業に反対の右翼団体や韓国居留民団の人々からは激しく非難され、海運関係の業務を小林力三商店から切り離すことを決める。こうして設立されたのが富士運輸㈱で万景峰号の代理店となった。74年を皮切りに幾度か北朝鮮を訪問し金日成主席とも面会したのだが、2002年、北朝鮮による横田めぐみさんの拉致事件が表面化した。「日朝友好に貢献しようと頑張ったのに、こんなことになろうとは…」と、衝撃と痛哭の思いであった。2006年夏、百歳を目前にして、二代目力三は波乱にみちた人生を静かに閉じた。

文・望月迪洋（「新潟研究」事務所主宰）

株式会社「コバリキ」創設100周年へのメッセージ

原子力産業協会顧問
元・東京電力常任監査役　宅間 正夫

小林力三様は、私が東電柏崎刈羽発電所勤務のころ「新潟県を豊かにする会」会長として発電所へのご支援に大変なご尽力をいただき、大きくて懐深い慈父のごとき力強い後ろ盾に大船に乗った気で発電所運営に当たりました。あるとき小林様と、例のごとく温めの燗をした“越の寒梅”をやりながら「義経伝説」を楽しんだ後、柏崎市の古書店で偶然、大正頃の小谷部全一郎「成吉思汗は源義経也」を見つけてお届けして大変喜ばれました。懐かしい思い出です。

小林力三サイドストーリー
同時代を生きた方が語る二代目力三の姿

本物の美術愛好家

元新潟日報社社長　五十嵐 幸雄

小林力三氏とは40年ほど前、私が40歳ちょっと過ぎのころ、ある画家の個展会場で同席したのが出会いの始まりです。その場で県内の美術事情に詳しい氏の存在を知ったのです。それからは美術展や各種催しのパーティなどで氏との懇談の機会が増え、ときには二次会になることも。アートに疎い私にとっては、教えられることが多く、勉強になりました。的確、シンプルな表現が魅力的でした。

久保尋二氏（元新潟大学教授、美術史、故人）は著書の中で「真剣に創作する美術家」「それを支持し育てる本物の美術愛好家」「それに共鳴、支持する公衆」が一体となったとき、その地方の美術水準は向上する―と述べています。因みに久保氏は教授退任ののち新潟市美術館長に就き、その美術館に小林氏は自らが戦前に購入したプロレタリア前衛美術家の絵画多数を寄贈しました。小林力三氏は「本物の美術愛好家」だったと思います。

ご　挨　拶

代表取締役
小林 建

100周年記念誌を作成することを決め、色々と書類、写真を探す内に初代小林力三の自筆回顧録が出てきました。初代の父の上京から始まり、自身が独立を考えるに至る経緯は、起業家としての苦難に満ちたものであった様でした。

その反面、日本が、そして新潟が世界に羽ばたこうとする時代に呼応し、大陸との関係を築き商売を拡大していった先人には、憧憬と共に一抹の嫉妬も感じます。

満州鉄道関連の新潟での権益を得て、度々朝鮮、中国に渡っていたころが、二代目力三の最も輝いていた時期だったかもしれません。

戦後は建材事業に活路を求めながら、石炭というエネルギービジネスから手を引かざるを得なかった無念が、原子力の推進に二代目力三を向かわせたのかも知れません。また、大陸や半島と関わってきたが故に、帰国事業にも積極的に取り組んでいました（但し、本文にもある通り相手国の実情が明らかになるにつれ悔やんでもいました）。

まさに当社コバリキは、原子力と北朝鮮という、新潟が抱える２つのセンシティブな問題に、直接当事者として関わってきた企業でもあるのです。

時代を読み時流に乗る、環境変化に応じ変身する、信念を持ち人のいやがることも進んで引き受ける。企業経営に求められるこれらの行動原理を、これまで当社は実行出来ていたのだと思います。

先代、先輩、お客様、地域から受け継いだバトンを、これからも次の世代へ渡し続け、願わくばまた100年後に、今の我々に思いをはせてくれる者がいてくれることを願って止みません。

執筆をお願いした望月様には、当事者も知らなかったことまで教えて頂き、有り難うございました。また、寄稿頂いた宅間様、五十嵐様には心より感謝申し上げます。

会社概要

- 創　　業　大正 2年12月 1日
- 設　　立　昭和59年 8月 1日
- 資 本 金　5,000万円
- 代表取締役　小林　建

事業内容

- 土 木 事 業　パイプ工事、橋梁用伸縮設置工事、ポリパイプ工事、融雪装置工事、フェンス・防護柵工事、ポンプ設備工事
- 建 築 事 業　リフォーム工事、内外装工事、住宅新築工事、外構・エクステリア工事
- 資機材販売　セメント製品、建築資材、鉄鋼製品、上下水道製品、除雪車・建設機械、環境製品、油脂・燃料
- 保険・不動産　各種生命・損害保険、駐車場・不動産管理

沿　　革

- 大正 2年12月　小林力三商店創業
- 昭和27年 1月　株式会社に改組
- 昭和50年10月　商号を株式会社コバリキに変更
- 昭和59年 8月　株式会社コバリキエンジニアリングを設立
- 平成 8年 9月　業務効率化のため2社を合併、今日に至る
- 平成24年 4月　仙台営業所開設
- 平成25年 8月　仙台営業所移転

建設業許可

- 許 可 番 号　新潟県知事許可（特-24）第14808号
- 許可年月日　平成24年5月28日
- 建設業の業種　土木工事業、建築工事業、とび・土工・コンクリート工事業、屋根工事業、電気工事業、タイル・レンガ・ブロック工事業、鋼構造物工事業、防水工事業、内装仕上工事業、機械器具設置工事業、建具工事業、管工事業

その他許認可

- 一級建築士事務所／新潟県知事登録 (ハ)第3640号
- 宅地建物取引業／新潟県知事 (4)第4109号
- 産業廃棄物収集運搬業許可証／許可番号 01508145614

株式会社コバリキ
KOBARIKI
〒951-8052　新潟市中央区下大川前通四之町2185番地
TEL:025-222-5121　FAX:025-229-5621　URL: http://www.kobariki.co.jp